

若い世代が示す“現代のリアル”

—次世代と紡ぐ言語聴覚療法—

| 一般社団法人鹿児島県言語聴覚士会 会長 | 竹中 恵太

新春の候、鹿児島市医師会ならびに地域医療に携わる皆さまにおかれましては、ますますご清栄のことと心よりお慶び申し上げます。

このたび、鹿児島市医報新年号・新春随筆特集号への寄稿の機会を賜りましたこと、深く御礼申し上げます。私は、2025年5月より鹿児島県言語聴覚士会の会長を拝命いたしました。垂水中央病院の竹中恵太でございます。日頃より、医師会の先生方をはじめ、多職種の皆さまの温かいご理解とご協力のもとで、県内の言語聴覚療法が支えられていることに改めて深く感謝申し上げます。

会長としての職務を担うようになり、これまで以上に県民の皆さまの日常生活における「ことば」「聞こえ」「嚥下」の支援が、医療・介護・福祉の領域を横断しながらますます重要性を増していることを痛感しております。また、超高齢社会を迎える鹿児島県においては、疾病構造や生活様式の変化に応じた、新たな言語聴覚療法の提供体制や多職種連携の強化が求められています。これからの地域医療の発展のためには、専門職としての技術の研鑽のみならず、互いに学び合い、支え合う姿勢が欠かせません。

本稿では、会長業務の一環として行いました、養成校での講義について述べさせていただきます。新任の身ゆえ至らぬ点多いかと存じますが、どうぞ温かくお読みいただければ幸いです。

今回、4年課程の養成校において、4年生を対象に「言語聴覚療法管理学」の講義を行う機会を得ました。言語聴覚療法管理学は、

医療・福祉・教育現場における言語聴覚士の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として活動する際の知見を得る事を目標としており、就業前後のソーシャルスキル、身近な社会保障等の社会的知識、言語聴覚士会の声、鹿児島県の臨床現場の近況、臨床現場をはじめとする現役言語聴覚士の声、臨床施設報告、他職種連携について学ぶものとされています。私は鹿児島県言語聴覚士会の会長として、言語聴覚士会の声についての内容を主軸とし、臨床活動を行う言語聴覚士として、鹿児島県の臨床現場の近況と臨床現場をはじめとする現役言語聴覚士の声についても講義を行いました。



内容としては、①アイスブレイク②管理とは？③鹿児島県の言語聴覚療法を支えるシステム④具体的な鹿児島県言語聴覚士会の取り組みの大きく4つの項目で構成しました。

②の管理とは？では、まず言語聴覚療法管理学を学ぶ意義について、臨床運営、組織管理、専門職育成、社会貢献の4つの視点から

述べました。それぞれ、臨床運営では効果的で安全な療法の実施に繋がること、組織管理ではチームや施設全体のマネジメントに必要であること、専門職育成では教育・人材育成・キャリア形成にとって重要となること、社会貢献では地域や社会における言語聴覚士の発展に不可欠であることを伝え、まとめとして、自身のその時々立場に合わせて必要な「管理」の視点を持つことの重要性を強調しました。



③鹿児島県の言語聴覚療法を支えるシステムでは、鹿児島県言語聴覚士会について、組織の目的や役割を地域連携や社会貢献、教育・研修、他団体との連携、広報といった視点から説明を行いました。さらに、鹿児島県言語聴覚士会が組織として機能しない事でのデメリットやコロナ禍以降オンラインの研修が増加したことを原因の一端とする退会者の増加などについても触れた後、グループワークとして、鹿児島県言語聴覚士会の管理者側になりきり『県士会に入るメリット』『どのよう

な活動で満足度を上げるか』『会員を増やす取り組みはどんなものがあるか』の3つについて検討し発表まで行いました。『県士会に入るメリット』では、人脈が広がることや情報共有が可能となる、学習しやすい環境が得られる、知識・スキルの向上に繋がるといった意見がありました。『どのような活動で満足度を上げるか』では、若い世代特有の目線からの声も多く、オンデマンド配信や会員限定のデジタル教材、匿名でのQ & A 掲示板、ポイントカードの作成、認定資格取得の支援制度などの意見がありました。『会員を増やす取り組みはどんなものがあるか』では、自由な意見が多く聴かれ、年会費の軽減・割引や新規会員紹介割引といった金銭面に関する意見、会員継続特典や景品と交換できるポイント制度といった特典付加に関する意見、SNSを用いての若い世代への情報発信、グッズ販売などを伴ったイベントの実施といった様々な意見がありました。

④具体的な鹿児島県言語聴覚士会の取り組みでは、県委託事業で鹿児島県言語聴覚士会が運営を行っている、失語症者向け意思疎通支援事業について、失語症者を取り巻く環境から支援制度、事業の成り立ちと鹿児島県における活動経緯などについて説明しました。最後には現在の事業課題を提示し、今後必要と思われる活動や働きかけをグループワークにて検討しました。挙げた意見として、活動としてはキャラクターの作成やキャラクターを活用してのSNS活動、フラッグや4月25日の失語症の日に合わせたイベントなどの意見が聴かれました。働きかけでは、関係機関へのポスター掲示や公共交通機関へのラッピング・宣伝カー、失語症カフェ、アニメ制作などが意見として挙がりました。総じて、若い世代への周知として、メディア、公共の場、イベント、オリジナルコンテンツ(歌、CM、キャラクター、アニメ)を通して、失語症に関する支援事業を幅広く浸透すること

を目指す意見が目立ちました。

今回の講義を通し、私自身も「管理」について改めて考えるとともに、グループワークを通し、『養成校学生ならではの』『若い世代ならではの』の意見も聴取することができました。今回挙がった意見が現代のリアルであり、新規入会してくる若い世代の多くの意見だと思いますので、今後我々が意識変革を起こしていかなければならない部分であり、今後の鹿児島県言語聴覚士会活動の運営について非常に良い学びとなりました。



結びにあたり、改めて鹿児島県の医療・福祉を支えておられる全ての皆さまに、心より敬意を表します。私たち言語聴覚士は、医師・看護師・リハビリ専門職・介護職・地域支援者の皆さまと共に、暮らしの場で生じるコミュニケーションや摂食嚥下などに関する困りごとに寄り添い、その人らしい生活を支える役割を担っています。県内の多様な現場で、多職種が互いの専門性を尊重しながら連携することで、より安心できる地域づくりが進むものと確信しております。

さらに、今回述べさせていただきました学生指導や後輩育成は、専門技術の継承にとどまるものではありません。患者さんへの寄り添い方、言葉の選び方、そして専門職としての矜持や温度感など「目には見えない大切なもの」を伝え、紡いでいく営みだと考えます。今の時代に即した考え方に加え、忙しい日々

の中で見落とししがちな価値を、彼らは純粋な姿勢で私たちに思い出させてくれます。だからこそ、次の世代が安心して学び、挑戦できる環境をつくることは、現在を担う私たちの使命であると強く感じています。

鹿児島県の地域医療が今後さらに豊かに発展していくためには、世代を超えて支え合い、学び合う土壌を育て続けることが不可欠です。新しい一年が、若い人材の成長を後押しし、地域の言語聴覚療法に新しい風を吹き込むものとなることを願いながら、筆を置かせていただきます。